連載　第110回

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家　三木　哲

● カンポンに学ぶ

明治以降、日本の建築界は脱アジア・西欧化を目指していた。平城京などの都市計画は中国からの「風水五行」に従い街造りや家造りがなされていた。

戦後日本住宅の平面計画は、住まい方調査による食寝分離論＝ダイニングキッチンを出発点としている。

日本の集合住宅はヨーロッパのニュータウンから住棟配置や近隣住区システムなどを学んできた。

その結果、今の住宅地は、均質な住宅が並び、暮らしの匂いや個性が感じられなくなってしまった。

住宅地計画に当たり、東南アジアの住宅地、カンポンに着目し調査して来た布野修司さんの仕事は興味深く、示唆に富み刺激的である。

その布野さんが企画し、日本建築学会が呼びかけた東南アジアの住宅地を見るツアーの募集があった。

インドネシアの首都ジャカルタ近郊の幾つかのカンポンを布野さん達と見てまわった。

カンポンとは現地では「原住民の村」を意味する。

ジャカルタは４世紀から16世紀にかけてヒンドゥー教や仏教を信仰する王国があった。

今はイスラム教が大半を占めるが、当時の生活文化や地域的建築の名残がカンポンには残っている。

ジャカルタの人口の６割がカンポンに住んでいると言う。かって住民は国王や王族に従い、職人や商人として生活をしていた。そのため作業場や店舗等が付く住宅も多く、モスク、路地、ゲートなど、コミュニティによってつくられた地域の共用施設が混在し、個性的で特色ある住宅地を形成する。

戦後日本の都市住宅には路地や坪庭、通り土間はなくなり、均一な住宅地になっている。

カンポンの生活や暮しぶりは現代日本の住宅地とは異なる豊かで変化に富む住宅地が創られていた。

カンポンに内在するコミュニティーの形成過程と変化を読み解き、多様な生活の匂いや生活様式の変化を解説する布野氏の話は興味深い。

海に近いカンポンでは、川が貿易や地域の情報交換の場として使われ、川に面し高床式の家もあった。

これは、ミャンマーのシャン高原インレー湖の水上に15万人が暮らすのと同じような高床式住居群で、水上をつなぐ渡り廊下は、日本の瀬戸内海・安芸の宮島の厳島神社を想起させる。

カンポンの人々のコミュニティは、西欧や日本の住宅地とは異なり、非常に強い絆が感じられた。

個性豊かな暮しの伝統的住宅、カンポンの路地

1.7万以上の島々で構成されるこの国はイスラム教徒の人口が多い。が、780～90年頃に大乗仏教を奉じていた王家により建造されたボロブドゥール遺跡は遺跡総面積は約1.5万㎡。高さは33.5mで、巨大なマンダラを表現した仏教遺跡で、ブッダの誕生からの教えを精緻な彫刻で表現し見事だった。

ミャンマーの数千基の仏塔からなるパガンの仏教遺跡群、その南東にあるカンボジアのアンコールワットの遺跡群、さらにその南東の、このボロブドゥール遺跡を世界の３大仏教遺跡と言われる。

他の仏教遺跡と比べるとボロブドゥール遺跡は１ヶ所にコンパクトにまとまり密度が高い。

一方、インドネシアのバリ島はヒンドゥー教徒が多い島で、棚田とヒンドゥー寺院が多く、ここで演奏されるガムラン音楽の競演はすばらしく、時間の過ぎるのを忘れさせ、エキサイティングで、私は大好きだ。

私は1995年までの間、２～３回インドネシアを訪問している。

環太平洋の海溝では、1960年にチリ沖でM9.5の巨大地震が、2004年にスマトラ島沖でM9.0の大地震が、2010年にはチリ沖でM8.8の地震が発生した。これに続いて2011年に東北地方太平洋沖で、M9.0の海溝型巨大地震が発生し、甚大な津波被害をもたらした。

2004年インドネシアの海溝型地震と大津波発生直後、直ちに被災地に向かい、津波被害の調査をし、その被害を報告すべきだったと後悔している。

この地震は2011年３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震と同規模の海溝型地震で、東日本大震災の津波被害を予知させるものであった。

海溝型地震による原子力発電所などの沿岸施設の津波対策が求められたが、電力会社や日本原子力委員会の学者は対策を取らなかった。

インドネシアをもっと深く知り、阪神大震災以上に海溝型地震の威力と津波対策を調査していたら、原発被害などを軽減できたかもしれない。

みき・てつ
㈲共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。
URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。
建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。